

平成30年度 佐賀県立伊万里高等学校 学校評価結果

<p>1 学校教育目標</p> <p>○自然を尊び郷土を愛し、人としての優しさに満ちた豊かな人間性と、自ら考え正しく行動する自主自律の精神を育てる。(自律)</p> <p>○個性と創造性を伸ばす個に応じた教育を進めるとともに、自ら判断し、自ら学ぶ力を育成する。(創造)</p> <p>○国際化、高度情報化の進む社会の中で、せまい価値観にとらわれず、友愛の精神に溢れ、共生社会の担い手として、社会や地域の発展に貢献する人材を育成する。(友愛)</p> <p>キャッチフレーズ 「みんなが主役 ～明日の伊高はあなたが作る～」 校訓「自律」「創造」「友愛」を教育の基本とし、一人ひとりが主役であるということを自覚し、理想を高く掲げ、自ら学ぶ意欲を養い、心身ともにたくましく、明朗で若さにあふれ、文化の創造や産業の振興など社会や地域に貢献するために、自分がなくてはならないという気概と情熱に満ち生徒を育成する。</p>	<p>2 本年度の重点目標 ～地域の期待に応えることのできる普通科進学校を目指す～</p> <p>「地域の期待に応えることのできる普通科進学校を目指す」 (1) 学力向上と進路保障 『伊高イノベーションプロジェクト』 ・生徒一人ひとりの進路意識を高め、早い段階で目標を明確にし、進路目標実現のために生徒一人ひとりが自ら努力するように指導する。 ・早期に基礎学力の定着を図るとともに、進路目標実現に必要な応用力を身につけさせ、生徒一人ひとりの潜在能力を引き出し、最大限に伸ばし育てるように努める。</p> <p>(2) 自己有用感の育成 ・自己有用感(自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということ)を、自分自身で認識する)を育て、自他ともに認め合うことのできる生徒を育成する。</p> <p>(3) 情報モラル教育の充実 ・インターネットの急速な普及により生徒を取り巻く環境は複雑に変化して問題が多発している。このような情報社会を生き抜き健全に発展させていくために、身につけておくべき考え方や態度を育成する。</p>
---	---

達成度 A：ほぼ達成できた

B：概ね達成できた

C：やや不十分である

D：不十分である

3 目標・評価							
① 学力向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	・授業での主体的な活動 ・学習課題の効果的な活用 ・家庭学習時間の確保	・授業アンケートでの「集中して授業を受けた」の項目を「3.5」以上にする。 ・授業アンケートの「課題が学力向上につながった」の項目を「3.3」以上にする。 ・家庭学習調査で1・2年生の平均家庭学習時間2時間以上、3年1学期段階で3時間以上にする。 (第1学年) 「学習習慣の確立と学力の着実な向上」を目指す。 (第2学年) 「教科学習の量と質のレベルアップ」を目指す。 全国模試において ①各自のGTZカンファ ②学年偏差値53、英語偏差値50の到達 (第3学年) ・受験生としての学習・生活の型の確立 ・自学自習の徹底と学力の向上 一人ひとりの進路目標達成 ・国公立大学80名以上合格、難関大学・学部10名以上合格	・授業開始の取り掛かりを早くし「チャイムtoチャイム」の授業を実践する。 ・課題計画一覧を活用し、計画的かつ効率的な学習に取り組ませる。 ・生徒の主体的な深い学びにつながる授業の研究(各教科)。 ・家庭学習状況や授業内容の定着状況について、学年・教科で定期的に検証・分析し改善につなげる。 (第1学年) ・授業と課題に真面目に取り組ませる。・家庭学習習慣と予習・復習のサイクルを確立させる。 ・手厚い学び直し。・進路意識の育成・早期確立。 (第2学年) ・事ある度に、普通科で学ぶ意味「普通科での幅広い学びは、未来を生きていくための総合的な教養の礎であり、10年後、20年後に生きていく力を今養う。」を呼びかけ、再認識させる。 ・全国模試と学習状況調査で得られたデータを、PDCAサイクルで事前指導、事後指導に十分活用する。 (第3学年) ・家庭学習を課題のみで終わらず、自身の苦手科目、分野への取組や暗記の時間の確保。 ・朝、10分休み、昼休みなどのすきま時間を有効に活用できる。クラス・学年の早期の雰囲気づくり。 ・朝の時間(8:40～8:50)を、小テスト、小論文練習、読書、「Column Reading」に活用。 ・教科書をベースとした、入試問題を意識しながらの習熟度別授業展開。 ・課題、小テストの工夫と学習会、課外講座の内容の充実。 ・模擬試験を十分に活用し、目標設定・分析を行うことによる学力の向上。 ・現代社会の様々な問題とその背景を知ることを通じ、論理的思考能力や表現する能力の育成。 ・「Column Reading」の継続、進路学習や授業での活用、小論文指導での活用。 ・総合的な学習の時間を使った志望校研究、課題研究。 ・個別の進路希望にあった十分な進路指導、個別指導、面談の実施。 ・担任会、進路検討会等を利用して、各教科の現状分析、指導計画等の報告と情報共有。	B	・授業アンケートの「集中して授業を受けた」の項目は1・2学期を通じて平均3.6、「課題が学力向上につながった」の項目は平均3.4であり、生徒としては学習に真摯に取り組んでいるという自己評価であった。また、家庭学習調査では、1・2年生は、1・2学期とも平均2時間で目標に達していたが、3年生1学期は2時間半弱で受験生としての意識の切り替えが遅かったようである。 (第1学年) ・授業と課題に対し、ほとんどの生徒が真面目に取り組むことができた。しかし、中にはただ出しているだけのものも見られた。 ・家庭学習習慣がなかなか身に付かず、予習に対する意識付けが不十分であった。 ・進路意識については、進路サポート等の活用で、意識作りはできたと思う。 (第2学年) ・事ある度に「文系は理科、理系は地歴の勉強」の大切さを訴え、すべての科目に努力すること、幅広い教養を身につけることの意味を理解させることに努めた。 ・全国模試に臨むにあたり、GTZのランクアップと偏差値目標値に対する意識は根付いたが、結果は目標値に到達できなかった。(文系:49.4、理系47.7) ・全国模試と学習状況調査はそのデータを分析し、関係者全員で会議を開催して問題点を見出し、改善に向けた方策を考えて実行するPDCAサイクルの体制をつくることができた。 (第3学年) ・朝の時間を、学年団が協力をして、教科や小論文練習、「Column Reading」に有効に活用することができた。結果として、強化すべき科目や分野に重点を置いた時間の使い方ができた。また、「Column Reading」の活動をj通して、生徒達は、様々な分野の社会問題に触れ、推薦入試や面接等の際に役立てることができた。新聞記事を活用して小論文の練習を行うこともできた。 ・朝の時間や休み時間等のすきま時間を有効に活用できる生徒が、徐々に増えてきた。もっと、早い時期から、学年全体が休み時間を有効に活用できる雰囲気作りができればよかった。 ・学力向上のため、各教科において、習熟度別の授業展開や課題の工夫を行うことができた。添削指導も継続して行い効果的であった。また、進路指導部と各教科と連携をとりながら、強化すべき教科に力を入れるための特選や特別講座等を行った。学習会や特別講座を実施したことで、学習に対する意欲や進路意識の高揚が見られた。 ・家庭学習時間は、徐々に増加はしたものの、受験生としては、時間が十分とは言えなかった。各模擬試験の振り返りを行い、自分の強化すべき科目や分野を意識して取り組ませよう働きかけを行ってきたが、1年次、2年次の基礎基本が定着していない生徒もおり、これまでの学習量が不足していることは否めない。	・生徒は学習にまじめに取り組んでいる意識があるが、学習の定着に至る学習になっているかが問題である。「学びの基礎診断」や模試分析等を通して、学年や教科内で学習指導に関するPDCAサイクルを確立し、指導に活かしていく必要がある。 (第1学年) ・課題の提出期限を守り提出することは引き続き指導し、今後は取り組み方についても指導していきたい。 ・家庭学習の必要性をしっかりと認識させ、2年の途中からは、5教科になることを意識させ、国英数の基礎学力定着を早めに取り組みさせる。 (第2学年) ・3学期に行った諸行事(修学旅行OB・OG訪問、直後の進路講演会と小論文講座)が、今後学習の量と質のレベルアップにつながることを期待。 (第3学年) 1、2年次で家庭学習の習慣や自立した学習態度を十分に身につけておく必要がある。進路達成に向けて、基礎基本の土台の定着と苦手の教科や分野の強化を十分にさせておくことが必要である。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の推進	・学習効果を高めるICT機器活用	・「授業でICT機器が有効に活用されている」と回答する生徒の割合を80%以上にすする。	・教員一人ひとりが授業での効果的なICT機器の活用を考え、電子黒板や学習用PCを積極的に活用する。また、そのような活用の機会について各教科で研究し、教材等を共有する。	B	・学校評価アンケートで「授業でICT機器が有効に活用されている」と回答する生徒の割合は95.2%と高評価であった。一方、「ICT活用教育の推進に努力している」と回答した教師は79.1%であり、教師による温度差が若干感じられる。	・ICTを積極的に活用している同僚から学んだり、校外の研修に積極的に参加したりして、さらに学習効果を高めるICTの活用について教科内で研究する必要がある。
	○進路指導	・進路目標の明確化 ・希望進路の実現	・進路に対する高い志を持ち、早い段階で自己の将来について真剣に考え目標を明確にし努力させる。 ・個々の希望進路の実現に向けた指導を行い、地域に信頼される進路実績を上げる。 ・センター試験受験者を学年の95%以上とする。 ・国公立大学合格80名以上、難関大学、難関学部(医・薬)10名以上の合格を目指す。 ・適切な情報提供や講演等を実施し進路意識を高める。	・朝特課の3分前着席完了を実践し、主体的な学習を促し学力の向上を図る。 ・進路講演会やオープンキャンパスを通じ進路意識を高めるとともに、県の合同学習会への積極的な参加を呼びかけ高い進路目標を持たせる。 ・進路希望調査(各学年2回)と進路検討会(3年3回)、進路情報交換会(1・2年各1回)を実施し、生徒の進路希望と成績を把握し効果的な指導につなげる。 ・模擬試験は原則全員受験とし、進路希望に応じて難関大模試や看護模試や個別大模試を実施する。また、難関大講座・小論文講座の計画的な実施や就職希望者への個別対応などきめ細かな指導を行う。 ・進路閲覧室の利用を増やし、自ら調べ、考える姿勢を育成する。「進路の手引き」、「翔雲」などを通じ、的確な進路情報を提供する。	B	・3年生は6月に、1・2年生は1月に進路講演会をおこなった。受験に対する具体的な内容に生徒たちの反応も良く、進路意識向上につながった。県の合同学習会にも多くの生徒が希望し、参加した。特に3年生は希望者が多かった。 ・進路希望調査と3年進路検討会、1・2年進路情報交換会は計画通り実施でき、生徒の情報交換と教師の指導方針の共有に役立った。 ・難関大学の指導や小論文・面接指導では職員との理解と協力を得て熱心な指導ができていた。国公立大学のA・推薦入試では9名が合格した。 ・センター試験の出願は学年の93%であった。	・1・2年次から普通科進学校としての進路意識を高めさせ、日々の学習習慣を確立させる。早期に受験勉強をスタートさせる。 ・3年間を見通した進路学習計画を立て実行すべく、総合的な学習やホームルームの時間の使い方を工夫する必要がある。 ・次年度から朝特課がなくなるので、それに代わる学力向上にむけての方策を考えていかなければならない。朝の時間に表現力・思考力を向上させる演習を検討中である。 ・小論文や面接の個別指導に対する全職員による指導体制は維持していくと同時に、入試問題の研究や授業の改善工夫を教科内で検討するなどして指導力の向上を図る。 ・現行のセンター試験に替わる新テストの情報収集とその対策の検討を行う必要がある。
	○読書指導	・学校図書館の多面的な利用の促進 ・豊かな読書体験を持つ生徒の育成	一人一人の生徒や教職員のニーズに配慮した図書館運営に努める。 ・朝の読書や校内読書会を通して、良書に触れる機会を増やす。 ・年間貸出冊数の目標2,000冊(生徒1人4冊)	・新規購入図書を「図書館だより」だけでなく、集会等でも紹介し、図書館利用を呼び掛ける。 ・「読書」だけでなく、「自学自習」の場として図書館利用をアピールする。 ・「佐賀語り」を使った朝の読書の時間も設け、郷土愛を育む。「作品論コンクール」や「プリオバトル」による校内読書会など本校独自の取り組みを継続し、生徒の読書レベルの向上に努める。	A	・「図書館だより」を毎月発行や昼休み・放課後の図書館利用生徒の増加などもあって、4～12月の貸出冊数が1,887冊(職員除く)となり、目標(2,000冊)達成が見えてきた。1月から2月の貸し出し数も順調であり、目標達成できるものと思われる。 ・新規購入図書では、芥川賞や直木賞、本屋大賞の書籍を始めとして、新書を積極的に購入し、生徒の進路に役立つようにした。 ・朝の読書の時間を設け、また、学級文庫を設置して、読書活動の活性化を図った。 ・「作品論コンクール」「プリオバトル」「百人一首大会」などの行事を通して、本校の文化的レベルの向上に寄与できた。	・「図書館だより」の毎月の発行、学習空間としても利用しやすい図書館づくりを行うことにより、今年度以上に図書館への来館数及び貸出冊数の増加を見込みたい。 ・貸出冊数が生徒間に偏りがある。偏りを解消するために「図書館だより」において多種多様な書籍の紹介を行う。 ・「作品論コンクール」「プリオバトル」「百人一首大会」などの次年度も継続して行い今年度以上の文化的レベルの向上をはかる。
○伊高はちがめプラン	・郷土(ふるさと)の自然と文化、歴史の理解 ・進路啓発	・「伊万里学」で地域文化の体験活動をする。(1・2年生) ・「キャリア教育」の視点に立った学問研究や職業研究をとおして、進路意識を高める。 ・校外での生徒の体験活動への参加を積極的に奨励し、生徒の参加を促進する。	・「伊万里学」の研修内容を充実させる。 ・職業セミナーや大学の出前講座や様々な講演会を実施し、系統的組織的な進路啓発を行う。 ・校外活動への積極的な参加を呼びかけ、進路意識を高める。また、進路啓発のために校外活動体験発表会を実施する。(日本の次世代リーダー養成塾、聞き書き甲子園、女子中高生夏の学校、県青少年派遣プログラム等) ・「佐賀語り」を活用し、佐賀を誇りに思う生徒を育成する。	B	・ふるさと再発見活動や「伊万里学」講演会を通して、地域に対する愛着を定着することができた。 ・職業セミナーや大学の出前講座については予定通りの実施ができ、生徒もそれぞれの希望の進路について意識を高めることができた。 ・多くの生徒が校外活動に積極的に参加し、有意義な研修ができた。 ・「佐賀語り」を朝読書の時間で活用し、佐賀を誇りに思う生徒の育成ができた。	・講演会やセミナーの講師の選定については、より生徒のキャリア意識を高めることができるように、今後も検討を続ける。 ・本年度のふるさと再発見活動を基盤として、郷土の現状だけでなく今後の展望を見据えた活動を継続する。 ・校外活動については学年の先生方との連携を深め、より積極的に呼びかける。 ・「佐賀語り」の活用について、朝の読書との連携を強化する。	

② 自己有用感の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・思いやりの心の育成 ・清掃活動	・自己有用感を育み、自他ともに認め合うことのできる生徒を育成する。 ・健康で安全な学校生活が送れるよう、環境整備と保全に努める。 ・清掃指導の徹底を図り、学習環境を整える。	・各集会や日々のホームルームにおいて、自己有用感を育成するような講話を行う。 ・「生徒様理解カード」の活用により、「気になる生徒」を早期発見し適切に対応する。 ・毎月安全点検を実施し、校内外の危険箇所を速やかに対応する。 ・落ち着いた学習環境を整えるため、清掃活動を全職員・全生徒で実施する。 ・個人で出したゴミの持ち帰りについて、徹底を図る。	B	・健康診断の項目ごとに「健康診断だより」を発行し、健康診断の意義を理解したうえで受診できるよう指導した。目標である専門医療機関への早期受診はできていないものの、100%ではない。 ・健康づくりのための啓発を、生徒保健委員を通して発信することができた。	・クラスや部活動等での生徒の悩みや「気になる生徒」の早期発見と適切な指導に取組んでいきたい。 ・定期的に保健委員でロッカーの点検をし、整理整頓が不十分な生徒に注意喚起をする。
	●健康・体づくり	・望ましい生活習慣の形成 (自主的な健康管理)	・毎日の朝食摂取を目指す。 ・定期健康診断の結果に基づく、早期治療への啓蒙を図る。 ・ICTを活用した保健指導の充実を図る。	・保健だよりを通して、朝食の必要性または食事の重要性について啓蒙していく。 ・健康診断の結果について、本人・保護者に周知徹底し、早期治療を促す。 ・健康診断結果や保健室利用状況を活用し、自己の健康に関心を持たせ、生徒自身が健康課題を解決するために必要な知識や能力を育成する。 ・朝や帰りのホームルームで、健康づくりのための啓発を生徒保健委員を通して発信する。	B	・朝食摂取率は平日が90.1%、休日が74.7%であった。今後も保護者・各教科と協力して食事の重要性を指導していく必要がある。 ・健康診断の項目ごとに「健康診断だより」を発行し、季節ごとに「保健だより」を発行した。健康診断で異常があった生徒へは、通知を配付し受診を促しているものの、未受診や報告漏れが大変多い。 ・生徒保健委員は文化祭において各自が調べた健康情報を展示した。	・「健康診断だより」「保健だより」の発行を継続し、内容を充実させる。 ・健康診断結果を踏まえた専門医療機関への受診率を向上させるため、未受診者に対しては2学期にも再度通知をするなどして受診率を改善する。 ・生徒保健委員会は定期的に活動する。
	●いじめの問題への対応	いじめのない学校づくり	・深い生徒理解に立ち、生徒がいきいきした学校生活を送れるように留意する。 ・いじめの早期発見・早期対応に努める。 ・万一いじめが起こった場合、その解消に全力を挙げて取り組む。	・全人格的な接し方を中心とし、生徒との深い信頼関係を築くようにする。 ・生徒の実態をきめ細かく把握するように努める。 ・学期に1回、いじめに関するアンケートを実施する。 ・スクールカウンセラーや養護教諭と連携して、いじめの把握、迅速な対応を図る。	B	年間いじめ覚知件数は9件、認知件数は9件であった。定期アンケート等で早期に発見することができた。友人関係においてお互いの信頼の度合いが違う場面が目立った。友人関係の構築について考えなおす必要がある。	・友人関係の作り方・接し方について集会・HRの際に話をし、 ・特性を持っている生徒に関して、担任や特別支援教育コーディネーターと連絡を密にし、面談を実施していく。
	○生徒指導		・登下校の時間の厳守 ・SNSの利用モラルの向上 ・交通安全指導の徹底 (第1学年) 「落ち着きのある、規範意識を備えた生徒の育成」を目指す。 ・基本的な生活習慣の確立 ・規範意識の育成 (第2学年) 「基本的な生活習慣、自己コントロール力、人との接し方、関わり方が身に付いた生徒の育成」を目指す。 (第3学年) たくましい心身と品格・品性を兼ね備えた生徒の育成	・生徒指導について全職員の共通理解を図り、全職員で指導する。 ・完全下校時刻19:15を厳守するよう下校指導を行う。 ・集会、HRを利用しネットでのトラブルを未然に防ぐよう指導する。 ・自転車マナー・ルールの厳守に注意喚起を行う。 (第1学年) ・基本的な生活習慣を確立させる。・校則、社会のルールを守らせる。 ・人を大切にすること。・時間を意識して行動する。 (第2学年) ・学習用PCによる情報確認や生活記録の作成を通して、自己管理能力を高める。 ・日頃から生徒の状況の観察と対話に努め、小さな変化を見逃さない体制をつくる。 (第3学年) ・朝特選3分前、授業1分前準備着席完了と授業時の挨拶を徹底させる。 ・安易な遅刻・欠席をなくす。授業を大事にする姿勢と自己管理能力を育成する。 ・学校生活の中だけでなく、SNSの利用の際にも、互いに思いやり、自他ともに尊重できる人を育てる。 ・人間関係や生活の基本である挨拶を自分から言い、身だしなみ、マナーを重んじる人を育てる。 ・自ら掃除を行い、学習環境を整備し、整理整頓を徹底させる。 ・学校行事、生徒会活動、部活動において、学校の中心となる役割を担うことを通じて、リーダーシップ・社会性・協調性を育てる。 ・世の中に目を向け、将来、未来を担う人として、社会にどのように貢献するかという視点をもった生徒を育成する。	B	・登校に関しては近隣の私有地を使用する現状から、年度途中に校地内乗り入れを許可する流れとなりだいぶ減ったと思われる。しかし依然として学校手前で降りてくる生徒もおり指導が必要だと感じた。下校に関しては部活動顧問の下校指導が必要であると思った。また完全下校を部活動の下校時刻と捉える風潮があり、教員の時間厳守の意識が欠けている。・SNSは再三の注意にも関わらず若干ではあるが指導する生徒がいた。これからは集会等で啓発することが必要である。・歩行中、自転車乗車中の大きな交通事故はなかったが、苦情の電話は数件あった。急ぐあまりの危険な行為であったことから時間を守る意識を持つように指導してきたい。 (第1学年) ・基本的な生活習慣の確立はほとんどの生徒ができていたが、余裕を持って行動するとまではいかなかった。 ・校則、社会のルールは遵守できたが、相手のことを考え、行動することができない生徒がいたのが残念であった。 (第2学年) ・行事予定や学習課題計画を毎週データで配信したが、その確認を行わない生徒集団が最後まで残った。 ・Classiを使った生活の記録とその分析は、クラス単位で進めることができた。 (第3学年) 授業、部活動、課外活動等を通して、各々の生徒が、大きく成長を遂げた。3年生としての自覚をもち、リーダーシップを発揮して行動する生徒が多見られた。3年間を通して、学級や学年集会を通して、品格・品性を備えた生徒を育成すべく、声かけや働きかけを行ってきた。しかし、特課の遅刻やSNSの利用について指導をしなければならぬ場面もあった。	・登下校の厳守の交通ルールの厳守と保護者を含めたマナーの向上が大切だと思う。そのためにも集会や保護者会総会などの連絡や生徒指導の発行をしたい。 ・SNSについてはなお一層の注意喚起をし、個人情報の意味を理解するよう指導してきたい。 (第1学年) ・次年度は、修学旅行等も控えているため、もっと時間を意識し、余裕を持って行動できるように、継続的に指導してきたい。 ・自分がされたら嫌なことを、深く考えずに平気でしているため、教師側も根気強く指導し、精神的成長を目指したい。 (第2学年) ・メモ帳を用意させて、普段からメモをとる習慣を生徒に身につけさせる。 (第3学年) 1年次から、粘り強く、語りかけ、指導を続けることが必要である。自分自身で考え、正しく判断し、行動できる力やたくましい心身を育てていくことが肝要である。
	○生徒会活動		・主体的な委員会活動が年間を通じて継続できるようシステム化を図る。 ・体育の部のリーダー活動の見直しを継続する。 ・文化の部の文化的な意識の向上と見直し及び文化部からの意見集約を行う。 ・課外活動の時間を確保し、文武両道を達成できる環境作りを努める。 ・各部活動で下校時刻の厳守、学習への切り替えを促す。	・生徒のリーダー性を養成するために、教育活動全体を通して生徒の主体性と自主性を向上させる取組を立案・実践していく。 ・部活動の活動時間については、学校全体や各学年での行事の立案段階で確保できるように努めていく。 ・文武両道を実現するために、生徒がより意欲的・主体的に部活動へ取り組めるよう、教職員が指導力向上に研鑽を積んでいく。 ・下校時刻については、全職員の共通実践を徹底することで、時間厳守の定着化を図っていく。	B	・委員会活動では、厚生委員会が募金やペットボトルキャップの寄付を新たにを行い、年間を通して活動できるものを作ることができた。 ・伊高祭体育の部では、フォークダンスのリーダーたちに団員への指導を徹底させ、「見世物」としての価値を高めることができた。しかし、リーダーたちのリーダーシップや総団長制など来年度以降も指導及び改善が必要である。 ・伊高祭文化の部では、引き続きステージ発表や展示を再検討する必要がある。また、生徒の休憩場所となる教室の確保も新たな課題として挙がっている。 ・部活動においては、加入率は高い割合を維持している。しかし、部内の人間関係のトラブルや部室の鍵の管理の甘さ、下校時刻厳守の不徹底など課題は多い。	・委員会活動については、来年度以降も職員や生徒と意見を出し合って、継続可能な活動を模索していく。 ・伊高祭体育の部については、伝統として残すものと生徒の実態を照らし合わせて、新たな体育の部の在り方を作り出していく。 ・伊高祭文化の部については、LGBTなど社会情勢にも目を向け、構成を考えていく。 ・部活動については、職員・生徒会中央役員・部長等が中心となって、よりよい部活動を行っていく。まずは部室や用具の管理、活動時間の厳守などすぐに行えるところから実践していく。

③ 情報モラル教育の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○情報モラル・リテラシー教育の充実	・正しい知識の理解と活用における実践	・他人に迷惑をかけず快適に情報機器を活用するための知識や技術を身につける。 ・SNS等でのネット犯罪に巻き込まれないようにする。	・情報の授業だけでなくそれぞれの授業を通し、正しい情報機器の活用について指導を行う。 ・ホームルームや集会で機会あるたびに注意を喚起する。また、講演を実施し正しい知識を身につける機会を設ける。	B	・講演会を行ったり、印刷物を適宜配布して、SNS利用のマナーやネット犯罪に巻き込まれないための注意について考える機会を設けた。しかしながら、スマートフォンの1日の利用時間が長い生徒や利用の仕方に注意を要する生徒もいる。	・SNS利用のマナーやネット犯罪については、生徒に直面する問題であるので、今後もホームルームや集会、配布物等を通して注意喚起していく必要がある。
	○情報セキュリティ教育の充実	・学習用PC及びパスワード等の管理 ・個人情報の管理	・毎日の学習用PCの持ち帰りを徹底する。 ・パスワードや個人情報の管理の大切さを理解させ自己管理できるよう指導する。	・充電切れ等による予備機の貸し出し件数を減らす。 ・ホームルームや授業を通し自己管理の大切さについての指導を行い、パスワードの再発行の件数を減らす。 ・集会や講演を通して正しい知識を身につけさせ、自己責任の重要性を考えさせる。	B	・学習用PCの忘れや充電切れのため予備機を借りに来る生徒が多く、すべての予備機を貸し出ししても足りない時が多々あった。また、パスワードを忘れる生徒もいて、機器やセキュリティの管理が十分とはいえない生徒が見られた。 (第2学年) ・個人所有のPCを毎日持ち帰る習慣が身に付かず、授業等で必要になって予備機の借用を申し出る生徒が多数見られた。	・学習用PCは毎日持ち帰り、充電し持ってくるという習慣を身につけさせる必要がある。 ・パスワードの管理は社会人としても身につけておかなければならないことであることを認識させ、自己管理の大切さを理解させる指導が必要である。 (第2学年) ・生徒にPCの管理意識を高めさせるだけでなく、各教科の授業やクラス活動での使い方を再度検討し、よりよい活用方法を考えたい。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務等の効率化の推進 ・日常業務におけるICT機器の効果的な活用	・職員間の情報共有を積極的に進め、業務への効率的な取り組みを推進する。 ・連絡や調査をペーパーレスで行い、業務の効率化を図る。	・定時退勤推進日を週2日も受け、職員に周知徹底し、時間外勤務を少しでも減らす努力をする。 ・日々の連絡や各種調査等をPCを用いて行い、集計等の効率化や時間の短縮など業務軽減につながるよう工夫する。また、その方法について、学年や分掌間で情報交換を行い、活用する機会を広げていく。	B	・月曜日と水曜日を定時退勤推進日とし職員間の意識向上を試みた結果、時間外勤務時間は若干減少したが、まだ職員全体に十分浸透しているとはいえない。 ・各学年で連絡事項を学習用PCで行っており、効果的な活用ができていた。調査やアンケートについても徐々にペーパーレスで行うようになってきているが、まだ集約を手作業で行っているものもある。	・定時退勤推進日と部活動の休養日、放課後の特別講座の実施日の関係を整理し、より定時退勤しやすい環境作りを考える必要がある。 ・職員全体の連絡やアンケート集約などをパソコンで行えることはパソコンで行うようにして、業務の効率化を図る。

④ 本年度の重点目標に含まれない評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針の周知	・学校教育目標の周知 ・キャッチフレーズの周知 ・本年度の重点目標の周知	・学校評価アンケートのそれぞれの項目で周知率を80%以上にする。	・各教室やコモンホール、昇降口、事務室前などにキャッチフレーズを掲示し、誰もがいつでも目に触れるようにする。 ・学校から発信する情報(ホームページ、はちがめ便り等)を通じて紹介する。 ・毎日のホームルームや集会の際に話題に取り入れて生徒に話しをする。 ・保護者に対して、後援会総会や学年保護者会等の機会に紹介する。	A	・キャッチフレーズを各教室やコモンホール、昇降口、事務室前などに掲示したり、学校から発信する情報(学校だよりや三者面談資料)に掲載するなどした結果、生徒、保護者に浸透した。学校評価アンケートでは、学校教育目標(校則)の周知度は、生徒で約80%、保護者で約85%、外部が100%であった。重点目標の周知度は、生徒で約60%、保護者で約70%、外部で約90%であった。	・学校便りの発行やホームページの更新を適切な時期に行い、保護者や外部の方に学校の取り組みを更に理解してもらえるよう努力する必要がある。 ・保護者への配布物や保護者集会を通して、学校の指導方針を十分理解してもらうよう努めていく。
	○開かれた学校づくり	・魅力あるホームページ ・広報紙の定期的発行・配布	・ホームページ利用可能な保護者の70%、近隣中学生の80%以上の利用を目標とする。 ・後援会総会の出席率を50%以上にする。	・ホームページの最新情報を充実させ、最新の情報を提供する。 ・広報誌「はちがめ便り」を月1回のペースで発行し、地域や中学校への情報発信を拡充する。 ・後援会総会の内容を充実させ、複数回案内文書を出したり、生徒や支部の役員を通じて参加の呼びかけを充実させる。	B	・学校行事や生徒の活動を中心に、できるだけ最新の情報を確かな時期に提供できた。 ・学校便りも、生徒の最新の活動を中心に、定期的に発信できた。 ・後援会総会の出席率は50%を下回り、目標の数値を超えることはできなかった。	・具体的な方策は継続し、生徒の個人情報の取り扱いには細心の注意を払いつつ、よりいっそう充実した内容になるように努めていく。 ・後援会総会については、より一層出席率を上げるため、入式や役員会など様々な機会を通して粘り強く呼びかけていく。
	○教職員の資質向上	・各種研修会の実施 ・分掌会議、教科会議の充実	・校内で実施する研修会や講演等への職員の参加率を90%以上にする。 ・勤務時間内に設定している毎週の分掌会議、学年会議、教科会議の時間を有効に活用する。	・生徒を指導する上で必要な各種研修や指導力の向上につながる研修を各分掌で企画し適宜実施する。また、生徒対象の集会や講演会にも職員も参加し研鑽の場とする。 ・各会議で個々の意見を反映させ、共通理解のもと組織的に取り組む体制をつくる。 ・各教科で研究授業や公開授業を実施し、教科の学力向上と指導力向上について研究する。	B	・月曜日と水曜日を定時退勤推進日とし職員間の意識向上を試みた結果、時間外勤務時間は若干減少したが、まだ職員全体に十分浸透しているとはいえない。 ・各学年で連絡事項を学習用PCで行っており、効果的な活用ができていた。調査やアンケートについても徐々にペーパーレスで行うようになってきているが、まだ集約を手作業で行っているものもある。	・定時退勤推進日と部活動の休養日、放課後の特別講座の実施日の関係を整理し、より定時退勤しやすい環境作りを考える必要がある。 ・職員全体の連絡やアンケート集約などをパソコンで行えることはパソコンで行うようにして、業務の効率化を図る。

●は共通評価項目、◎は共通評価項目のうち特定課題

4 本年度のまとめ・次年度の課題

<本年度のまとめ>
・学校教育目標、キャッチフレーズについては、広報誌や学校ホームページ、またアンケート等を通じて、生徒・保護者・外部に対し概ね周知が図られたが、重点目標については、特に生徒への周知が不十分であった。本校の存在意義はどこにあるのかを改めて生徒に理解させ、生徒の学習に対する意欲を高める必要がある。
・「学力の向上」については、各教科や各学年において日常の授業改善を含む進学指導に様々な方策を立案して取り組んできたが、なかなか実績に反映されなかった。少人数学習別クラス編成の活用など、より効果的な指導を実践することが必要である。
・「自己有用感の育成」については、教職員がその重要性を理解し、様々な教育活動の場面で実践することができた。一方で、生徒の身勝手な言動で、その対応に苦慮する場面もあった。
・「情報モラル教育の充実」については、朝のホームルームや終礼、学年集会での啓発活動、研修会等での計画、継続的な指導は実践できた。ネットハラスメントによりSNSの不適切使用等が明らかになり、生徒への指導が必要な場面もあった。メディアリテラシーも含め、心の教育を推し進める必要がある。
・伊高イノベーション委員会(略称:IP)を立ち上げ、将来の伊高のあるべき姿を考えながら、総合的な学習の時間や、教育課程、校時等さまざまな改善を行った。
<次年度の取組>
・「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」に取り組むことで、地域社会との連携を深め、地域の信頼に応えることのできる普通科進学校づくりを推進していくと同時に、生徒募集のための方策を含めた学校活性化のためのプロジェクトを立ち上げ、魅力ある学校づくりを推進していく。
・学力の向上を大きな目標とし、教科指導、進路指導の在り方を再構築することで、進学実績の向上を目指す。
・各教科分掌及び各学年の取組、教科指導、部活動指導、生徒会活動、部活動、広報活動等、あらゆる教育活動や教育実践に対する指導法や方策の蓄積を図り、学校の組織力の向上を推進していく。